

春日部福音自由教会 2020年10月11日 室内礼拝（中央会堂）11:00（同時配信）

聖書 新約聖書 コロサイ人への手紙 3章12節～17節

説教 「上にあるものを求めて」 山田豊協力牧師

おはようございます。司会者の報告にありましたように、本日は9時から谷原第4公園で野外礼拝が行われ今頃競技に励んでいる、そういう時間ではないかと思えます。昨日ご存知のように雨が降っておりましたけれども、朝行きました時にはもう、水はけが大変良い公園ですので、コンディション良く礼拝を、またその後運動会を続けて行なっていることだと思えます。チラシには大運動会と書いてありましたけれども、天地創造の神様の大きな愛の中で半日楽しく過ごすことができると思えます。私共はこの会堂でこうして礼拝をささげ、また今日はリモートによって丘の上の会堂、また庄和の会堂、そしてそれぞれの家での礼拝に与っていることをごさいます。ちゃんと映っていますでしょうか。ともに主のみことばに聞いて参りたいと思えます。

I 上にあるものを求めて

本日の聖書の箇所はコロサイ人への手紙の3章です。この箇所は私たちの教会の年間聖書通読、聖書通読表に基づいているものです。私たちは1年間でこの聖書、旧約聖書の最初から新約聖書の最後まで、読み通そうということで聖書通読表を準備しております。それをを用いる用いないはそれぞれの自由ですけれども、1年間かけて聖書を読み通す。なかなか大変なことであるかと思えますけれども、聖書全体をいつも心に留めていきたいというようなことで聖書通読表を用いております。今日はコロサイ人3章、新約聖書を皆さんとともに開いているわけです。このコロサイ人への手紙、今はコロサイ人（じん）への手紙と言うようになってはいますが、パウロが囚われの身になっている時に書かれた手紙のひとつです。パウロは捕えられまして、カエサルに上訴する、訴えると言ったわけです。そう言ったことで、彼はローマに収監され、ある程度自由を与えられたというように聖書には書いてありますけれども、外出が制限され、ほとんど外出できなかつたと思えます。そういった時に弟子たちが訪ねてきたわけです。そしてコロサイの教会の様子を伝えてくれました。その様子を聞きますと、エパfrasによってこの教会の礎は据えられたのだと思えますけれども、偽りの教えが入り込んで信者を惑わしている、そしてまた主にある兄妹姉妹の平和が脅かされている、そういったことを聞くわけです。心痛めたパウロは祈りのうちにこの手紙をしたためたのではないかなと思えます。

4章ありますコロサイ人への手紙の最初の2章では正しい教えは一体何であるのかということを書き、そして3章の部分は、（最初から手紙は章立てであったわけじゃありませんけれども）具体的な生活の勧めとなっています。上にあるものを求めて生きるということにして、そういう観点からこの3章そして4章の最初の部分は、何々しなさい、っていう命令、具体的な生活の勧めがあるわけです。そのような内容の中での3章の12節から17節を今朝開いております。私たちの訳を見ますと、何々しなさいという言葉が随分と沢山出てまいります。けれども聖書の書かれた元々の言葉を見ますと、12節から17節では命令形で書かれている言葉は四つだけなのです。

12節の「着なさい」という言葉は第3版では「身につけなさい」と訳されています。15節の「心を支配するようにしなさい」、そして同じ15節の「感謝の心を持つ人になりなさい」、感謝しなさいということ。そして17節の「住むようにしなさい」。第3版以前の訳ですと、「豊かに住ませ」という訳になっておりました。今朝

はこの四つの言葉をよりどころにして、みなさんと共にこのみことばに聞いて参りたいわけです。その前にですね 12 節をもう一度見て頂きたいのですけれども「ですからあなたがたは神に選ばれた者、聖なる者、愛されている者として」とあります。“これから具体的な勧めをするけれども、あなた方はこういう者なのだ、イエス様を信じているキリスト者はこのような者なのだ” ということ語っているわけです。

II 競技場にて

今日は運動会、かつて 10 月 10 日は体育の日でしたけれども、そういったことを覚えてアスリートにたとえながらこのみことばを適応して参りたい、そのように思っております。

イスラエルにはカイザリアという町があります。地中海に面した街です。この町はかつてヘロデ大王が、ローマ皇帝カエサルに敬意を示して建てた町ということになっています。現在ではヘロデの建造物がいわゆる遺跡として遺っているわけです。円形劇場も遺っておりますけれども、その円形劇場はリニューアルされて現在も使われているわけです。ちょっと想像して頂きたいのですね。地中海に面している町です。海岸線があります。すぐその海岸線の所にはお風呂が作られています。温泉ではないので導水橋を用いてお湯が引かれているのですね。そして内陸の方に入りますと、ベンハーという映画に戦車が出てきて何周も何周も回って競技をするというシーンがありますけれども、あいう戦車を使った周回コースがあります。それで更に内陸の方には 1 スタジアムの長さの直線距離の徒競走のコースがかつてあったわけです。1 スタジアムというのは約 200 M、今日のスタジアムという言葉の元になった長さの単位です。そしてさらに内陸に入りますと石で作った段々の階段状に出来た観客席があるわけです。そのような造りになっていたわけです。その観客席に座りますと、すぐ目の前には 1 スタジアムの直線コースが、それと隣り合うようにぐるっと回る周回コースが、もう少し目を上げますと海の海岸線のところには風呂がある。日本人ならば露天風呂というイメージだと思います。そして真青な地中海が広がっていくわけです。目を上げれば地中海のスカイブルー、澄みきった真青な空が無限に広がっている、そういう場所であるわけです。もっとも家内と私とで訪ねたときは、曇り空でそういう光景ではなかったのですけれども、イメージするとそのような天気であるのだろうなと思います。

民に選ばれた者であるアスリートは各地からやってきます。彼らは、この日のために肉体の鍛錬を重ねてそしてその力を発揮する特別な人達ですね。愛されている者である。他の誰でもない、自分たちの街の英雄として走ろうとしている選手を一心に応援している。おらが町の何々である、そんなイメージでしょうね。愛されている者である。そして彼らはこの声援を受けてスタートを切って競技を繰り広げるわけです。ヘブル人への 12 章を見て頂きますと、こういうみことばがあります。「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも一切の重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競争を、忍耐をもって走り続けようではありませんか」。スタジアムで声援をしている人達、それはまさに私たちの信仰の先輩たちが証人として励ましている、そういう姿に、このヘブル人への手紙の著者はだぶらせてこの言葉をしたためたのではないかなと思います。このコロサイ人への手紙の 3 章の 12 節の前半にある「神に選ばれた者、聖なる者、愛されている者」は、人生というレースを走っている、あるいは歩いている、私たち自身のことであるわけです。ただパウロが生きていたときも、あるいは現在も、アスリートは精一杯の競技を繰り広げるわけですが、一つ違う点があります。彼らは非常に身体能力に優れていたものでそれぞれの地域で選ばれて、そして競技をするわけですが、神様は、私

達を恵みによって選んでくださいました。何の取得もない、功もない、そういう者に、神様が目を留めてくださって、罪の中から救い出し清めてくださいます。私達を神様の大きな愛の中で育ててくださっているわけです。そこが違います。アスリートは自らの努力によって選手となり、レースに出ていくわけですが、神様は、何の功もない私に目を留めてくださって、それぞれの人生を歩ませて下さっているわけです。そういう私たちですから、上にあるもの、すなわち主イエスキリストを見上げながら歩む、そういう生活を具体的に送ることを勧めているみことばにもう一度目を止めてみましょう。

Ⅲ 着なさい

最初のこのパウロが語っていることばは 12 節の「着なさい」ということばです。深い慈愛の心、親切、謙遜、柔和、寛容を着なさいと書いてあります。長い間私も第 3 版に馴染んできましたから、ここを読んだ時に前の方がいいなって思ってしまったのですが、第 3 版を使われていた方がいらっしゃったらどんな感じで読まれるでしょうか。深い同情心、慈愛、という風に第 3 版では訳されておりました。何よりも「着なさい」っていうよりも「身につけなさい」、そういう言葉です。ここに書いてある一つの一つの徳目を今日は解説することは致しません。大切なことはこういったことを着る、身につけるって言う事ですね。キリストを信じて生きるということは知識として知っていくということ、それももちろんあるでしょうけども、まさに日常生活の中でこれらの徳目が自ずと表わされてくる、自然と現れてくる、そういうことであるわけです。もう少し読んでいきますと 13 節に、「互いに忍耐し合い、だれかがほかの人に不満を抱いたとしても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦して下さったように、あなたがたもそうしなさい。」とあります。14 節には「そして、これらすべての上に愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全です」。日常生活の中で“着なさい”というこのことばは、具体的には赦し合うこと、愛し合うという生活の中に表されていくわけです。これがまた難しいですね。なかなか赦せない。愛そうと思っても愛することができない。聖書の語る“愛”ではない違う形になったりもする。でもこのみことばに幸いなことが書いてあります。それは“主があなたがたを赦して下さったように”と書いてある。イエス様が私達を赦して下さったように。またヨハネの手紙第一の 4 章 19 節には“私たちは愛しています。神がまず私達を愛して下さったからです。”とあります。まずイエス様が、神様が、私達に愛を示して下さったのです。もちろん“赦しなさい”という言葉は、例えば私が過ちを犯したならば、赦された者であったとしても、その過ちを償うこともしなければならぬわけです。けれども私自身が生まれながらに持っている神様を信じない不信仰な、自分中心なこの罪を、主は十字架にかかって身代わりに負い、そして赦して下さいました。そのように赦し合いなさい、そしてご自分の最も大事なものを与えて下さった、そのイエス様のように愛し合いなさいと言われていました。これはどういうことでしょうか。私のイメージの中では、お母さんの胎の中に生まれる前の自分がいるような、そんな状況ではないかなと、何年前から思うようになりました。母の胎内は自分の意識にはその時全くありません。でも一番安全で安心できる場所なのだそうですね。正に神様に赦され、愛されているって言う事は、そのような大きな神様の赦しと愛の中に、私達が抱かれています。ですから私たちも心を尽くして、赦して愛することを、具体的に、自然と出来るような、そんな生活をしたいた願うわけです。そのために私たち自身が主イエス様を着る、それにふさわしい生活を送らせてもらえるような務めをして参りたいわけです。

IV キリストの平和に支配されて

2 番目にパウロが語っている勧めの言葉は 15 節です。「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい」ということです。キリストの平和があなた方の心を支配するようにせよ、ということ。この支配しなさいと言う聖書の言葉は、決定を下しなさい、決定を下す、という意味があります。審判が勝ち負けをジャッジする、そういう言葉です。まさにこの時パウロは、カイザリアに最初留め置かれて、そこからローマへ旅をしていくわけです。そしてローマで留め置かれているその時にカエサルの裁定を待っているわけですね。どんなジャッジが下るのだろうかを待っているわけです。そのことによって、彼の生活というものはコントロールされているわけですね。キリストの平和は、例えば山上の説教の中でも、あるいは公生涯の中でも、そして弟子たちが共に過ごした、私たちが今日いう“最後の晩餐”の席でも語られております。イエス様は、「わたしが与える平安は世が与えるものとは違います。わたしはあなたがたにわたしの平安を与えます」と言われました。キリストの平和なのです。私たちの国にも、色々ないわゆる平和活動ってものがあります。私たちはキリストの平和を頂いている、神様と和解させられてキリストの平和を戴いたものとして、“このキリストの平和で心を支配するようにしなさい”と言われた時にどんな行動が出てくるのでしょうか。

今年の 8 月の末にですね、会津若松にある教会を訪ねました。この教会には聖餐式の道具が置いてあるのですが、会津塗りで出来ている、会津漆器でできている聖餐具なのです。何年も前に、いろんな各地の教会が紹介されている図録でその漆器を見て、一度見てみたい、またそのような地元の優れた工芸品、美術品を用いて聖餐具を作られたその教会は、どんな思いをもって伝道牧会されているのか、是非知りたいとだいぶ前から思っていたわけです。ようやく今年実現できて、そしてそれを見させていただきました。訪問しますということ伝えてありましたので、会堂に案内されますと、このような聖餐台の上にですね、漆器の聖餐具が置いてありました。でもそれだけじゃなかったのです。見るとジョーオダネルさんの写真が何点か飾られていたのです。ジョーオダネルさんの写真で最も有名なのは“焼き場に立つ少年”だと思えます。小学校何年生なのでしょう。丸刈りの男の子が弟をですね、息絶えた弟をおんぶ紐でおんぶして、きつと口を真一文字に結んで、焼き場の前に立って順番を待っている写真です。つい最近 NHK でもこの少年は誰なのかということを追っていく番組がありましたけれども、あの写真、そして他に何点か飾られていたのです。百万人の福音を昔からとっている方はご存知かと思えますけれども、このオダネルさんの奥様がその教会の出身者なのです。オダネルさんは数年前に天に召されましたけれども毎年この 8 月は平和を覚えて礼拝をささげ、オダネルさんの写真を展示し、特に子供たちには戦争を体験された兄妹姉妹の話を、8 月に毎週語っている。そして平和のために祈っているとされました。そしてここには（礼拝堂）アッシジのフランシスの平和の祈りが掛けられているのです。ここは同じだなと思えました。そんなふうにして、8 月は礼拝をささげ、そして地域の教会として、平和のためにどのようにしているかを教えていただきました。その教会は、野口英世が若い時に洗礼を受けた教会であります。私たちはこのキリストの平和をどのように、教会としてあるいはお互いの生活の中で表していくことができるのでしょうか。自分のからだから、私たちの教会から自然に出るように、このキリストの平和に支配されて、コントロールされて歩みを続けて参りたいと思えます。

V 感謝の心を持つ

この15節の後半、3番目の勧めになります。「また感謝の心を持つ人になりなさい」。感謝の心を持つ人になりなさい、これについてはもう多く語ることはないと思います。喜び、祈り、感謝、ちょうど引用をしたいと思っております。またみことばが今日の週報に書かれています。私たちが自然にありがとうと言える、そのような日々の生活を送りたいものだと思います。

VI キリストのことばを住ませる

そして最後、第4番目ですが16節。「キリストのことばが、あなたのうちに豊かに住むようにしなさい」。豊かに住ませなさいということです。キリストのことばというのはみことばですね。イエス様の語って下さったおことばである聖書。またパウロの言葉が記されている聖書。あるいはヨハネによって書かれた黙示録、それも聖書ですね。新約聖書だけではなく旧約聖書もキリストのことばとも言えると思います。神様のおことばです。このことばを私たちのうちに豊かに住むようにしなさい。暗記したり読んだり聞いたりということで、私たちは心に蓄えようということです。確かに最初は頭かもしれませんが、知的なものかもしれません。なかなかそのように読んだり聞いたりすることに、不自由を覚えるという方もおられるかもしれません。でも、思わず心に、と言いましたけれども、このキリストのことばが、ちょうど山に降り積もった雪が融け、固い岩盤からだんだんだんだん中にしみこみ、腐葉土を通して清くされていって、そして何年も何年も経って、泉となって湧いてくる。そのようにして豊かに湧き出てくる。“キリストのことばをあなたがたのうちに住ませなさい” っていうことはそういう意味です。単に知っていますよ覚えていますよということではなくて、本当にみことばが私たち自身の心の中に染み込んでいく、それが溢れてくる、これがこのことばの意味なのです。

VII 知恵を尽くして

16節の後半を読んでいきますと、「知恵を尽くして互いに教え、忠告し合い、詩と賛美と霊の歌により、感謝をもって心から神に向かって歌いなさい。」とあります。教会の交わりの中で表されるって言うことです。そして最後の17節には「ことばであれ行いであれ、何かをするときには、主イエスによって父なる神に感謝し、すべてを主イエスの名において行いなさい」。このキリストのことばによって育まれた思いから出てくる、それぞれの行いがこの地を潤していくわけです。この街を潤していくわけです。けれどもですね、今の時代、皆さんマスクされていますけれども、家に留まりましょう、あまり出歩かないように、県の境を超えないように、言われるような時もありました。家に留まってなきゃいけない。けれどもですね、これが何日も何ヶ月も続きますとなかなか私達のこの体だけじゃなく、心と言いますか、精神的にもだんだんだんだん減入って参ります。そうなのですね。実はキリストのことばも私たちの中に留まっているって言う事は、ずっといるという意味じゃなくてそれが溢れてくる、それが前提でこれが語られているのです。会津若松の教会もそうでした。週報を見させていただきましたが、賛美歌何々1節、讃美歌何番第3節と書いてあるのですよ。うちと同じだなんて。でもつらいですよ。如何ですか。詩と賛美と霊の歌により、感謝をもって心から神に向かって歌いなさいって書いてあるのだけれども、そのつもりなのだけれどやっぱり1節だけでは、とかね。マスクがあっては十分出来ない。そういう中に私たちは今ある。どうしたらいいのかというのは私たちの課題であると思います。でもこういう時だからリモートで礼拝できると、体の弱い方、なかなか病が来て来られない方にとっては、これはすごくいいと思うのです。役立ちます。でもですね、私たちは今日本

に神様を礼拝して今主を仰いでいるでしょうか。リモートの方であれば説教に間に合うその時間だけいればいいやって、終わったらさよならというようなことはないでしょうか。最悪なのが説教になったから消そう、なんてね。そんな方はいらっしゃらないでしょうけれども、どこにあっても神様を心から賛美できる。それは本当にみことばが心の中にしっかりと蓄えられていて、まさに住んでくださって、そういったところから出てくることであります。今この時期、私たちはみことばをしっかりと心に住まわせていただくときです。

議事録を見ますと聖歌隊も再開に向けて話し合いを始めるということが書いてありました。アスリートがたとえ競技がなくても、日々鍛錬しているように、聖歌隊の兄妹姉妹も日々そのことを覚えて、それぞれの仕方でいいと思います。備える、何かしらの備えしているということは大切なことです。それが精一杯神様に賛美をすることにやがてつながっていくわけです。

Ⅷ ゴールを目指して

コロサイの教会の人たちは偽りの教えに翻弄され、平和が失われていた。そのことを聞いたパウロは心痛めてこの手紙をしたためました。私たちは神様からの手紙として今日このみことばをしっかりと心に受け止めさせて頂き、上を目指した歩み、上にあるものを求めた歩み、すなわち復活の主が来られて復活の主が私共を導いてくださる。そのこと覚えて歩みたいのであります。

もう一度皆さんカイザリアの競技場に自分が立ったとイメージしていただきたい。1 スタジアムのスタートラインに立ちました。目の前にはゴールがあります。およそ 200 m 先、あなたを応援してくれる仲間がスタンドから声をかけて応援してくれています。やがてスタートの合図とともに、この時代はたぶんまだピストルというものはありませんから、ドラか何かをたたいたのだと思います。そのスタートの合図とともに飛び出しました。声援が一段と大きくなります。そして走って走って走りぬいてついにゴール。実際のこの時代の競技では一番になった人にしか勝利の冠は与えられません。けれどもお互いがそれぞれの人生というゴールを走り切ったあなたの頭には、主イエス様が朽ちることのない冠を授けてくださいます。先に召された信子姉妹は文字通り、私たちより先にゴールしてくれて、いまスタジアムの観客席から私たちを応援してくれていると思うのです。上にあるものを求めて、新しい週走って参りましょう。ある時は歩いて、ある時は休みながら、でもゴールを目指して上にある希望を目指して、共に歩む生涯を新しい週、送らせて頂きましょう。

お祈りをおささげ致します。

天の父なる神様。あなた様が御子イエスキリストを救い主としてこの世に遣わしてくださったことを感謝いたします。私たちの主は、憐れみ深い父なる神様の御心を行い、十字架にかかって私たちの罪をきよめてくださいました。死にて葬られましたが三日目によみがえり、今は高きところで私たちのためにとりなしていただきます。主が赦してくださったので人を赦すことができる。イエス様が愛して下さったので、隣人を愛することができる、そのようなことが湧き出る日々を送らせてください。

主イエスキリストの御名によってこの祈りをおささげいたします。アーメン。

